



「ねえ」



sanukisoba

有村さんと知り合ったのは高校に入ってからだった。

中学校からあまり目立たない存在だった僕は、いてもいなくてもあまりみんなが気にしないようなそんな生徒だった。もしかすると担任の先生ですら僕の名前や趣味、性格とかそういう色々な僕の要素を把握していなかったんじゃないのかなとすら思う。僕自身は別に気にしていなかったんだけど。

だから僕は中学校時代のお友達と言われても、言葉に詰まる。いたのかな？

別に中学校時代のことを思い出したくないからとかそういう理由じゃないけど、僕は家から1時間くらいかかる都内の高校に進学した。自分の学力と、恐らく3年後に進みたいであろう進路を考えたときに最適と思われる選択をした結果だ。その高校には中学校の同級生は一人も進学しなかったのは単なる偶然に過ぎない。

高校生活が始まり1ヶ月もたつころ、僕は自分のポジションが中学校のころと何も変化していないことを知る。何処に行っても僕は僕なのだ。特に何の感慨ももたなかったし不満にも思わなかったけど、とりあえず休み時間も昼休みも僕は常に一人だった。

変化が現れたのは5月の連休があけてから。いつものように昼休み、一人でご飯を食べようとパンの袋に手をかけたときに有村さんは声をかけてきた。

「いつも一人で食べてない？」

有村さんはどちらかといえばクラスの人気者で休み時間や昼休みになるといつも周りに誰かがいる、そういうタイプだった。簡潔に表現するなら僕とは正反対だ。

返事に窮する僕を気にすることなく、有村さんは僕の隣の席の椅子に腰掛ける。

「まだ一回も話したことなかったよね。気になってたんだ」「というかクラスのほとんどの人と話したことないでしょ」「休みの日とか何してるの」「兄弟とかいるの」「趣味は」

有村さんはその日から毎日のように僕を質問攻めにした。僕は僕なりに誠実に答えたけど、有村さんは僕への興味が尽きないようだった。クラスで人気者の有村さんがなんで僕なんかに興味持つの、と聞いたことが一度だけあったけど有村さんはうるさい、と言って何も答えてくれなかった。

昼休みは有村さんがいつも僕のところに来るから、有村さんの友達も自然と僕の周りに集まるようになって、昼休みの僕の席はちょっとしたぎやかなスポットだった。中学校までの僕からす

ればちょっとしたマジックだ。

でも、もちろんみんなは有村さんと話すのが目的だから、それ以外の時間、有村さんといないときの僕には誰も興味を持たなかったし有村さんがいなければ僕は僕に過ぎなかった。

2学期に入ってから1週間くらい、有村さんは学校を休んだ。最初の2日間は誰も僕の席に来なかった。3日目になり「有村さん来ないね」と有村さんといつも話してるクラスメイトが僕の席に集まるようになった。

有村さんがいて、僕がいて、それでみんながいる。そういう環境に慣れきってたから僕は無論話を率先してできるわけでもないし、有村さんがいないと僕はただの聞き役に過ぎなかった。みんなの話はどこかカラフルで、そしてキラキラしていた。特に話に混ざることでもできず僕はただ、うんうんとうなずきながらお昼ご飯を食べる。

それでも、有村さんが学校に来るようになる1日前くらいには、クラスメイトが僕に質問をして僕は質問に答える、そんなやり取りをするようになっていた。みんなが言うには「何考えてるかわかんなかったけどおとなしいだけじゃん」ということだった。僕はどうやら有村さんなしの状態でもクラスメイトたちから受け入れられたようだ。

僕は相変わらず口数が少なかったけど、でも有村さんが登校するようになってからもクラスメイトたちの態度は変わることがなかった。朝には挨拶をしてくるし、休み時間も僕の周りには常に誰かがいるようになった。不思議なものだ。

でも、有村さんは、学校に来るようになってから一度も僕と話をしていなかった。

それからも学校生活は淡々と進み、気付けば冬休みまであと2週間くらいになっていた。僕は今まで経験したこともなかったような毎日を過ごし、朝から晩まで誰かしらと話している日々が続いていたし、それでも有村さんは僕に話しかけてこなかった。かといって僕自信が変化したわけでもないし、僕は気にはなりつつも有村さんに話しかけることはできなかった。

玄関で靴を履いていると、有村さんが話しかけてきた。

「ねえ」

聞こえた声は、僕の知っている有村さんの声ではなかった。どこか自信がなさそうで、頼りなげだった。

「うん」

徐々に、僕ら高校生にとっては永遠に感じられるくらいの時間を経てからの有村さんとの会話は、僕を少し緊張させた。

「一緒に、帰ってもいいかな」

「もちろんいいけど、一緒に帰るのがなんて初めてだね」

「話すのだって、久しぶりだよ」

僕は言葉に詰まる。

「最近さ、いつも誰かが周りから話しかけにくくなっちゃった」

有村さんは笑顔を見せた。

「坂巻君ってさ、いつもなんかボーっとしてて気になってたんだけど、最近はみんなと仲良くしてるし、ああ、私勘違いしてたんだな—なんて思ったらちょっと話しかけづらくなっちゃってさ。私勝手に勘違いしてわるいことしたなって」

有村さんの口調がはよくなる。さすがにこれは僕でも何かがおかしいなと気付く。有村さんは何か大切なことを言おうとしているんだろう。

しばらく無言が続いた。駅までの道が長く感じられた。

「ごめんね」

有村さんの声は震えていた。僕はどうしていいのかわからず「うん」とだけ答える。

「ごめんね。ほんとは違うの。悪いな—って思ったんじゃないの。ずっと坂巻君を独り占めしたかったのに、坂巻君が他の子たちにとられちゃったみたいで悲しかったの。私は前みたいに坂巻君の一番の仲良しでいたい」

「そんな、僕の一番の仲良しは有村さんだよ。それは間違いないよ」

僕が言い終わらないうちに有村さんは言葉を続ける。

「あのね、私坂巻君が好きなの。いつからか知らないけど、坂巻君が気になって話しかけて、毎日話をしてるうちに好きになっちゃったの。だから独り占めしたいの」

僕は生まれてはじめての経験であることを知る。告白ってのはされた方も緊張するんだ。

地面がちょっと揺らぐような感じがして、世界から少しずつ音が消えていって、心臓の音が大きく鳴り響くなかで僕は答えを口にしていた。